

# 九州国際大学 FD ニュース 2010 年度第 1 号



目 次
オフキャンパス FD 研修会
○ジグソー法・PBL によるワークショップ 研修
○ワールドカフェによるワークショップ 研修
○フィッシュボーンダイアグラムによるワークショップ 研修
質保証システムの確立に向けて

## オフキャンパス FD 研修会

2010 年 9 月 21 日、22 日の両日、宗像市のグローバルアリーナにおいて、オフキャンパス FD 研修会が開催されました。今回の研修会開催でジグソー法、PBL、ワールドカフェなどの授業運営のノウハウに関するワークショップが実施されました。

今回の研修会には 27 名（法学部：9 名、経済学部 7 名、国際関係学部 8 名、事務職員 3 名、1 日だけの参加者含む）の参加がありました。

オフキャンパス FD 研修会 スケジュール	
9 月 21 日（火）	
13:15～15:15	ワークショップ 1 協同学習でリテラシーを向上させる～ジグソー学習法による文章読解
15:45～17:45	ワークショップ 2 PBL(Project Based Learning)問題解決学習をプランニングする。
19:30～21:00	ワークショップ 3 ワールドカフェ：学生の能力
21:00～	懇親会
9 月 22 日（土）	
9:00～11:00	ワークショップ 4 「来年度の初年次教育の計画」
11:00～11:30	初年次教育関係研修会報告
11:30	解散

### ○ジグソー法・PBL によるワークショップ研修

法学部  
准教授 安藤花恵

9 月 21～22 日、宗像グローバルアリーナでおこなわれた FD 研修。最初はジグソー法のワークショップがおこなわれた。学部混成、教員と職員も混ざった 5 人 1 組のグループが 5 つ作られ、グループワークに取り組んだ。グルー

プの中の 5 人は、「初年次教育」に関する 5 つの新聞記事を分担して読む。自分の担当する記事をまずは 1 人で読み込み、それをグループの他のメンバーに説明する。5 つの記事の内容についてグループ内で共有した後、話し合いな

から5つの記事を1つのポスターにまとめていく。ゼミなどで本や資料を分担して読む時に使うことを想定したグループワークの手法である。5つのグループが、「九国大で初年次教育を成功させるには?」、「大学を工場に見立て、イラストを使って説明しよう」など、それぞれに違った視点で記事をまとめ、紹介していたことが印象的であった。

2つ目のワークショップは、PBL (Project Based Learning もしくは Problem Based Learning) を体験するものであった。岡垣で「ぶどうの樹」を経営し、独自の手法で地産地消のレストランを各地に展開している会社、グラノ 24K の社長、小役丸秀一氏にもご参加いただいたのテーマは、『八幡駅前にグラノ 24K が新店舗を出したら?』。各グループが新店舗のコンセプトについてアイデアを絞り、小役丸社長にプレゼンテーションをおこなった。「イベントスペースを作り、九国大生、地域の人々、JICA の関係者などが交流することのできるレストラン」、

「駅前、九国大内、スペースワールド、皿倉山頂上などに店舗を出し、そこをバスで結ぶ」などさまざまなアイデアが飛び出し、わが大学の人材は発想力が豊かであることを印象付けた。それに対し、小役丸社長はそのアイデア1つ1つに的確なコメントをし、さらに社長自ら、「リタイアしたお年寄りが若者のために、若者と一緒に料理をして食べさせるレストラン」というアイデアについてプレゼンをしてくださった。実際の経営者の視点というものを感じ取ることができ、PBL が学生の職業意識を伸ばすものとしても役立つことを身を持って理解できたワークショップであった。

どちらのワークショップも、ワーク後に「このワークを実際に授業で取り入れるとしたら…?」というテーマでディスカッションをおこなっており、今後実際にゼミ等でグループワークを取り入れる教員が増えることが期待される。

## ○ワールドカフェによるワークショップ研修

国際関係学部  
教授 高橋和幸

一つのグループあるいは組織において、あるテーマについて、構成員がそれぞれどのようなことを考えているのか、あるいはどのような認識なのかを確認しておくことは大切なことであろう。そのようなときに、「ワールドカフェ」といわれるグループワークが威力を発揮するのだと思う。

オフキャンパス FD 研修会においては、「大学で伸ばせる学生の能力」というテーマが設定された。ワークの流れは、こうである。

5名一組のグループを3つ作り、まずグループ内で上記テーマについて15分ほどフリートーキングを行う。机には模造紙が置かれ、そこに思い思いにメモもできるようになっている。何を書いても自由であり、他人がそのメモを見て、発想のきっかけになることも多い。

次に、二人一組で他のグループにお互い移動する。残った一人はホスト役として、移動してきた人々に、自分のグループでの議論の内容を説明し、それに対し他のグループ員も自分のグループでの議論を紹介し、その後、紹介された内容に関連のあることを意識しながら、さらにフリート

ークする。

最後に、席に戻り、ホスト役からどういう議論が展開されたかの説明を受け、これをもとにさらに話し合っていくというものである。

このワークは、結論を出すことを特に目的とはしていない。むしろ、お互いの考えを共有できることが特徴である。また話すのが苦手な人も、模造紙に考えを書き出せるし、他の人がそれを見て、新たな発想へつなげることもできるというものである。ただし注意する点は、事前に十分なアイスブレイクが必要で、それなしに始めると単なる雑談に終始してしまうという説明もあった。

私が所属する国際関係学部は、学生のコミュニケーション能力の向上へつなげる教育も目指している。これには、一方通行的な授業だけでは不十分であり、授業へグループワークを取り入れることの有効性について、学部内で共通の認識がある。

ワールドカフェは、まさにこのことに適したグループワークであると思う。

## ○フィッシュボーンダイアグラムによるワークショップ研修

大学総務室

片山 浩己

2日目の午前中は、藤井国際関係学部助教及び神力大学総務室長がファシリテーターとなり、「初年次教育の計画または初年次教育の成果発表会をテーマとし、15回の授業計画を立案」というテーマで、フィッシュボーンダイアグラムによるワークショップを行った。フィッシュボーンダイアグラムとは、特性要因図とも呼ばれ、特定の事象の原因分析に用いられる図表である。原因分析したい事象とその事象が発生するに至る主たる要因を一本の線で結び、その基本プロセスに影響を及ぼすさまざまな要因を付け加えていく。出来上がりの図が魚の骨のようになることから、そのように呼ばれている。問題解決を行うに当り、問題の要因を明確にするために用いられる手法である。

まず昨日のグループからメンバーを入れ替え、所属学部別に3グループを編成した。作業を始める前にファシリテーターからフィッシュボーンの完成図の例が配られ、それを基に今回の作業についての説明(今回はブレインストーミングとKJ法を組み合わせる実施)があった。各人が15回の演習の中でゼミ発表会までに行う準備事項を付箋

紙に記入し、記入した付箋紙を類似した内容毎にグループピングしてタイトルを付けた。タイトルを骨の先に、そのグループの中の事項を骨の間に貼り、頭に解決したい課題(今回は発表会を実施)、背骨にコンセプト、尾ひれに達成目標を記入して図を完成させた。その図を基にグループの代表者が発表を行い、その後発表内容についての質疑応答を行った。各グループの発表内容は共通のテーマだったにもかかわらず、図は全く違ったものとなり、グループ毎での考え方の違いが良く理解できた。最後にファシリテーターから今回のワークショップについてのコメントがあり、終了した。

フィッシュボーンダイアグラムはやや高度であるので、低学年の授業には向かないと思うが、高学年でグループワークに慣れている学生には取り入れることは可能ではないかと思う。最初はバラバラだったものが、様々な工程を経て最後は魚の骨の形になっていくのがとても興味深く感じられたワークショップであった。

## 質保証システムの確立に向けて

副学長 加藤和英

平成22年8月2日、独立行政法人大学評価・学位授与機構の主催による「学習成果を軸とした質保証システムの確立—学習成果の効果的なアセスメント・可視化・発信とは」と題する大学評価フォーラムを傍聴した。今回のフォーラムでは学習成果を軸としたPDCAサイクルをいかにして効果的に機能させ、質保証システムを確立していくか、という点が取り上げられ、質保証システムの在り方について活発な議論が行われた。

特に、高等教育機関が、従来の教員を中心とする「教育」を行う場から、学生を中心として「学習」を行う場に社会の捉え方が変化していること、併せて「学習成果」を軸とした質保証システムの構築とその有効な機能が重要にな

っていることが強調された。

このフォーラムで取り上げられた「質保証」については、平成23年度から開始される認証評価の第二サイクルにおいて、大学基準協会の大学基準の一つとして特に重視される評価項目である。本学においても質保証のシステム化に向けて本格的に取り組むことが求められており、フォーラムの概要を以下に紹介しておきたい。

### 1. 学士課程教育のパラダイム・シフト

大学評価・学位授与機構の川口昭彦特任教授による講演において、「授業内容や教育方法の改善」から「学習の質が向上したか、学習成果があがっているか」への学士課程

教育のパラダイム・シフトが起きているとの説明があった。そして、質保証システムについて、授与される学位あるいは職業資格の質が保証されなければならないこと、自主・自律を標榜する大学は質を自ら保証することができる内部質保証システムを構築することが不可欠であること（自己点検・評価が機能していること）、などの指摘があった。

## 2. よいアセスメントの共通点

高等教育分野のアセスメントで国際的に評価が高いリンド・サスキー女史(Vice President at the Middle States Commission on Higher Education)による講演では、教育—学習—アセスメント・サイクルが機能していることを前提に、まずは学生に最も学んで欲しいことは何か、成功する学生は何ができるのか、なぜそれなのか、どのように支援するのか、どのように把握するのか、などの明確な「成功する学生」像という重要な目標が定められていることが、よいアセスメントのための根底をなすとの指摘があった。その上で、よいアセスメントは①明確かつ重要な目標が定められていること、②教育の改善につながるなど有益、かつ活用されるものであること、③アセスメントの負荷を最小化するなど費用効果的であること、④高い評価が得られること、⑤合理性をもった精確で真実性のある結果であること、の5点が共通して重要であるとの説明があった。

## 3. 大学教育における「汎用的能力」の育成と就職実績

新井健一 Benesse 教育研究開発センター長より、高校、企業からの期待という視点から大学教育の質保証について次の通り報告があった。

ベネッセの調査によれば、保護者の大学に対する願いは「こどもの好きな分野で」「経済的負担が軽く」「就職できる力を身につけられる」学校に通ってほしいというものであり、大学の就職実績情報は、もはや入試に必要な偏差値や合格の条件などの情報とそれ以上の重みをもっている。この点、高校教員の進路指導等に関する意識調査でも、進路指導において①入試科目の内容や合格要件、②毎年度の卒業後の就職先、進学先、③毎年度の卒業後の就職率、進学率の順で、大いに必要との結果となっている。また、進路指導において①退学者、休学者数、②大学に対する企業からの評価、③毎年度の卒業後の就職先、進学先について

の情報が不足しているとの結果が出ているという。

大学と企業に対する調査結果では、大学の教育と企業の期待との間にギャップが見られるところ、ジェネリックスキルの育成と成果評価が課題になっている。企業が採用時に要件として重視する能力としては、チームワーク力、自己管理能力、問題解決力、リーダーシップ力、継続的な学習力などに高い数値が出ているが、これらは大学の正課内で明示的に指導している能力に関する学部長調査では低い結果が出ている。大学が最も重視している能力という調査結果が出ている ICT (情報通信技術) / 基本的な ICT スキルや情報処理スキルは、企業側では低い結果となっている。

また、大学のキャリアセンターに対するアンケート調査では、内定が複数社から取れる学生の資質として、「自分なりの考えをまとめる力が優れている」「文章力や口頭での表現力など、基礎的な力が優れている」「初対面の人でも良好な関係がつかれる」「思考が常に前向きである」「自分の長所・短所を的確に理解している」という項目が高く、結局「汎用的能力」に優れているという結果が出ている。逆に「授業にまじめに出席している」「学業成績がすぐれている」「1 年次から自分の進路を考え、準備している」という項目は低い結果が出ている。ただし、これはアンケート結果を数値化したものであり、この結果をどのように活用するかにあたっては、慎重に扱う必要がある。

そのほか、有信睦弘・東京大学監事(元東芝顧問)から、欧州で進む学位の標準化と質保証などの流れを意識しつつ、国際的に通用する学位を目指していく必要があること、濱口哲・新潟大学副学長(学務担当)から、学士課程教育をプログラム化し、プログラムごとに学習成果・効果、到達目標実現のための学習方策・方法を定めることなどに取り組んでいること、についてそれぞれ説明があったが、紙幅の都合から詳細は割愛する。

---

発行：2011年1月31日

九州国際大学 F D委員会

〒805-8512 北九州市八幡東区平野1丁目6番1号

TEL093-671-9010 Fax093-662-8340

<http://www.kiu.ac.jp>

編集：大学事務局 学務事務局

---